

去る2022年10月27日、11月17日に第22回AAF戯曲賞の一次審査会、二次審査会が行われました。今回は日本全国から91作品のご応募をいただき、審査にあたり審査員全員が全作品を読んだ上で議論が行われました。審査員の皆様に了承を得まして審査の内容を抜粋してお伝えします（編集している部分があることをご了承ください）。

一次審査会（10月27日）

進行：本日はお忙しい中、AAF戯曲賞審査にお集まりいただきありがとうございます。今年は日本国内から91作品の応募がありました。

審査に先立ちまして進め方について確認します。受賞作品としては大賞1作品、特別賞1作品を選出していただきます。大賞は、上演するという前提があるので1作品に決定していただきたいと考えています。特別賞は通常1作品ですが、過去に審査の議論の結果、どうしても2作品選出したい、という結論となり受賞作が2作品になった年がありました。また、昨年度の審査議論で話題に上がった同じ作家が特別賞を2度以上受賞することについて、同一作品でなければ問題はありません。これまでに同じ作家が複数回、特別賞を受賞されたことがあります。その他、審査の中で様々な論点が出ると思いますので、議論しながら方針を決めていくと考えていただければと思います。

まずは審査員の皆様に全体を読んだ所感を伺い、その後、審査に入っていきたいと思えます。

羊屋：自分自身の戯曲の読み方が変わったのか、今回は楽しく読めませんでした。その中でも、読んでいく中で少しずつピンとくるものがいくつか出てきました。あとは皆さんと話す中で見つけることができればと思っています。

鳴海：今年の応募作の傾向として、散文・小説みtainな物語よりも詩のような作品が多い印象を受けました。書かれている言葉が物語を作るというよりも、詩として置かれているような。テキストそのものによる構築性よりも、上演形態を（演出家に）託しているテキストが多いとも言えるのかもしれませんが。

鈴木：今回は初めての審査のため、応募作品ごとに、同じ「1枚」の原稿の中での文字数の差、文字の大きさや文字間の幅などのフォーマットの不統一が、まず気になりました。今回の応募作品にもあり、過去にもあったと聞きましたが、戯曲の内容に要請された形式として、例えば図像、楽譜を入れるといった工夫なら、理解できます。ただ、役柄A「○○」役柄B「××」のような会話体で進む「戯曲」が応募作のほとんどですし、その場合は、なるべく決まったフォーマットに当てはめるよう注意書きをしてもよいのでは？と考えました。たとえば小説の場合「活字原稿はなるべくA4判40字×30行の設定でお願いします」のような規定を設ける賞もあります。主催側がフォーマット例をダウンロードできるようにしておくのも手だと思えます。

下読みのない賞なので、応募作すべてに審査員が向き合うことになります。その負担を予想する目安として「枚数」を手がかりにしますが、フォーマットが不統一だと機能せず、一作一作読み重ねる時間、緩急が予測できない。ひとつの作品に向き合う時間にズレが生じると感じました。少なくとも、審査員に依頼して手渡す際に、そうした点を伝える必要はあるのでは。iPadを自分で用意し、PDFデータで読むようにしたら読みやすくなりましたが、これも審査員側のデバイスに依存するため、「審査を誰がするか？」という条件にも関わりますし、経済性などからデバイスを用意できな

い場合、審査の負担が大きくなる、または審査自体を引き受けられないという問題も生じると思います。

立山：私は紙で印刷したもののほうが読みやすいかなと思いつつ、一応データももらったけど、結局印刷した戯曲を持ち歩いて読んでました。結構な物量なので大変でしたが…今の話を聞いていたらデータのほうが読みやすかったのかなとも思いました。

岩淵：フォーマットについては書き手が自分に合ったものを選ぶのは良いと思っていて、そういう戯曲賞として受け止めています。読みやすさで言うと自分は紙（印刷されたテキスト）のほうが読みやすい。どのくらいのページ数か、とか読んでいて残り何ページくらいかとか体感できないと読みづらいんですね。

審査員としては2年目なので、長期的な応募戯曲の傾向まではわかりませんが、去年と違う傾向があるという印象はありました。

自分自身が今年気になった傾向・面白いと思ったのは‘話を聞く’というテーマや‘旅をして聞いたものを伝える面白さ’を扱っている作品です。全体の中で特に多かったわけではないですが…。「作者」は存在しているけど、伝聞形式で「語り」として伝える物語が気になりました。

立山：何ページも一人でしゃべるような作品もありましたね。鳴海さんがおっしゃった通り（どう上演するかを）「演出に任せているな」と思いました。

羊屋：短い作品が増えていますね。短くて、詩のようなものが増えた印象を受けました。以前、「戯曲はある程度長くないと」というポリシーの審査員との議論がありましたね。その時に「作品にそれぞれにちょうど良い長さがある、短いのが良い作品もある」という話をしたのを思い出しました。審査員が変わって応募作家が自由になったこともあるのかな？

鳴海：応募者がこれまでの受賞作品や審査レポートをどれだけ読んでいるかは分かりませんが…。自分の生活の中で学生などの若い世代に関わる機会が増えて、舞台作品として目安になる120分という時間感覚が視野に入っていないと感じるケースや、長い作品・物語が思い描きにくく「長さ」を必要とする世界を求めているのかもしれないという印象を受けることも多くあります。情勢としても、映画も90分作品が多くなってきました。音楽もイントロがない方が売れると言われたりもします。描きたい世界において「長さ」は必要ではなくなってきた流れはあるのかもしれませんが。たった100年前と比較しても、時間についての感覚が変わっているのではないかと思います。

言葉で世界観を規定して大きな物語をつくる、それも日常的な言葉で構築していくことに信頼感が薄くなってきているのかもしれませんが。言葉でひとつの世界をつくっていく魅力が感じにくくなっていく一方で、「私」が一人称で話す作品、経験した話、刹那的な会話で世界の最低限の輪郭を描く作品が目立ってきているように感じます。歴史を振り返ると、ルネサンス後期のいわゆる小説の起源に関わる作品たちは、私が経験した、誰かから聞いた、という話法でフィクションへの信頼性を高めています。今、現代日本の作家の多くが、同じような話法を使用しているのは興味深いです。

岩淵：昨年の審査でも地元の民話を聞き取った作品がありましたよね（编者注：第21回AAF戯曲賞一次審査通過作品『Yに浮かぶ』作：藤原佳奈）。作者が全部書いていくよりも作者がどんどん消えていく面白さがある気がします。昔の話を現代語訳して、それ

を伝聞して…となっていく中に作者が誰かわからなくなっていく面白さがあって、そのなかで作者の立ち位置はどうかというのも気になる点ではあります。

羊屋：作者の立ち位置とは？という点では最近出版されて話題になった『東京の生活史』（編：岸 政彦）とかも思い出しました。今回の応募作の中では『Terra Australis Incognita』とか。

鈴木：傾向の話をもう少し続けると、これはかなり大きな問題と思いますが、女性蔑視、トランスジェンダーやゲイといったジェンダーや性的指向のマイノリティー、外国人への直差別意識・偏見のあらわれ、あるいは差別的な表現が、必要なものとして考えられずに使われている作品が散見されました。わたし個人が持つある属性もターゲットにされた、差別意識・偏見による、むき出しの暴力のような表現に傷つけられた作品も相当数あり、かなりの負担を感じました。暴力的な事件をテーマにした作品もありましたが、作者がどのような経験や世界を見る目を通して、必要と感じてその暴力を表現しようとしているのか？と伝わるレベルにまで考え抜かれていない作品もあったと思います。こうした作品が上演され、受容される可能性のある、日本の演劇業界、演劇を愛好し志向する人々の世界線の一端を絶望的な気持ちで見る思いで、クラクラするところも……。

また、物語、詩、散文など形式や、時代設定、リアリズムとファンタジー、などにおいて、なぜこのようなかたちを採用しているかを考えられているのかも、多くの作品において疑問を感じました。作家自身がどういう作品、誰に影響を受けてきたのか、応募作家の皆さんは再考してみしてほしいです。これらは、他の審査員の皆さんにも聞いてみたかった点です。

立山：それは私もとても苦痛だと感じた部分でした。今の劇作を行う人はこういう感じなの？と思いながら読みました。暴力的、差別的な表現がすごく多い。作家さんたちがそういう風に世界を切り取っている。

誠実に読みたいけれど、戯曲を書く人にこういう表現をする人が多くいる、ということが耐え難いと思う部分もあった。読んでいる側としては…書きつけました、応募すれば読んでもらえる、読んで欲しいです、という思いを感じて、生きている、怒りを持っているのは理解できるのですが、暴力的でカウンセリングのようだと感じました。

これは毎年の傾向なののでしょうか？コロナで増えたのでしょうか？

鈴木：ヘイトスピーチとしか思えない表現が出てきて、どこかでうまく機能する場合もあるかもしれない…と思い、最後まで読み進めたけど、結局無頓着に使われた言葉づかいに過ぎなかった、という作品もありました。このような負担の中、これまで、他の審査員の方々はどうやって乗り越えてきたんだろう？と思いながら読みました。

羊屋：審査は複数の審査員でしているので、一人がトラウマ発動するような作品があった場合は他の人から話を聞く、というふうに対処してきたこともあるよね。

鈴木：ただ、トラウマを喚起するエピソードと、ヘイトスピーチでしかない表現は違うと思います。後者は暴力なので。具体的には、「ガイジン」「おかま」といった表現、ただの女性蔑視でしかないキャラクター造形などが、それを通して現実の問題をあぶり出そうとするなどの意図のない場合、抑止されるべき暴力だと思います。表現の自由とトリガー・ワーニングの葛藤と、暴力の抑止は異なるテーマだと思います。

羊屋：誰かに読んでもらってシェア、ケア、浄化になる、という部分があるのは分かる。でも、ここはそういう場所じゃない。読んだ審査員自身の心身はどうしたら守れるのか…。いろんな角度の意見が欲しいです。

鳴海：コロナ禍で変わった部分ももちろんありますが…戯曲賞応募作が日本人の作家傾向を一部反映しているとは言えると思います。旧弊的な設定や、暴力的な言葉の使用について無自覚で、批判的に活かされていないケースに出くわすと不安になります。今の日本人の共有感覚を反映しているのかもしれませんが。毎年、たくさんの戯曲賞応募作を読むことは、日本人が今、言葉をどう扱っているのかを知る機会でもあります。編集者、出版社、外部の目が入っていない言葉のフィールドワークというか。

岩淵：そういう感触が昨年より全体的に強い印象はありました。自分の状態なのか、量なのかは分からないですが…。

鳴海：ここ数年で演劇の世界でも、差別や、ハラスメントに対する話題がとて多くなりました。戯曲賞として、こういう言葉がレポートや審査の過程で出てくるのは良いことだと思います。戯曲の傾向、意識が変わる、選ぶ言葉が変わるのは良いことですよね。

羊屋：「面白い戯曲に出会いたい、見つけたい」、はじめはそう思って審査に参加していました。（審査員を）続けていくと、面白い戯曲を見つけるという他に、違う問題、戯曲や審査の背景にある演劇を創る環境の問題が出てきて、また戯曲の審査に戻って来る…、審査はそんな作業だと感じるようになりました。戯曲を選ぶ根拠、戯曲を「選ぶ」だけじゃなくて、創作者たちがいて、環境があって、また戯曲に戻ってくる。戯曲と向き合うのがマルチタスクになってきていると感じています。

進行：それぞれの視点からの所感、ありがとうございます。このあたりで応募作品についての話に移っていきたいと思います。順不同で構いませんので気になった作品について、お願いします。

立山：『負け戦』は書き方が軽快で上手い、と思いました。いかがでしたか？

鳴海：テンポづくりが上手くて、話をずらしていく感じは別役実や安部公房のような感覚を抱きました。前半の軽快さから、徐々に違和感を感じ始めて、最後にその根拠が開示されるという構造で、モヤモヤする読後感も面白いですね。

鳴海：『鞠の集い、それから公園』はどうでしたか。外部による支配の強さを意識的に作品化していたと思います。上演するとき色々なことが出来そうです。無責任に投げているのではなく信じているという印象。意識的な挑戦状だなと思いました。

羊屋：「ワークショップ」の扱いが面白いですね。（作中で扱われているのが）演劇のワークショップかは分からないけど…。かつて「ワークショップ」がちゃんとワークショップだった時代があって、そのあと「ワークショップ」という名前でのいろんな講座が増えた時代があった。ワークショップのファシリテーターの免許が取れる講座もあった。そのころに感じた胡散臭さについて書かれているようにも読めました。単なるワークショップではなく色味のついたワークショップ。シーンが進むにつれて、1、2、3とコンテンツの内容も変わって、色々な地層が入ってくる。もう少し読みたい。

鈴木：『山羊』はどうでしたか？

鳴海：ややロマンチックだとは感じます…描こうとしているスケープゴート、被害者、自分にはどうしようもないと思っている弱者、そういう存在や立場を構造と言葉でどうにか表現しようとトライしている点に可能性を感じました。

岩淵：『ブラボー』は昨年のノミネート作品『k q』（作：佐々木すーじん）と重ねながら読んでみました。カテゴリーが難しいですが…パフォーマンス？と呼ぶのが良いのかな…。戯曲として読みづらい、儀式めいた感じの作品は評価が難しい…でも印象には残っている。なんとも言葉にしづらけれど、何かしらの力があるのだと思います。

鳴海：いろいろな角度で論じられると思います。振付について詳細は書かず、熱量についてしか書いていない。とはいえ、戯曲も俳優の熱量しか書いてないとも言えますよね。「詩とは何か、ダンスとは何か」も問うているように感じます。

羊屋：戯曲の中で扱われているテキストが『資本論』と『聖書』という点も気になる。

岩淵：『Terra Australis Incognita』の9層の構造は読みづらいが、きっと人が上演すれば見やすいんだろうなと思いながら読みました。読みづらい割に内容は読みやすく、寓話的で立体的。教訓、メッセージじゃない、柔らかい部分が上演を通して実現されそう。

羊屋：南の島の話、シンプルに南の島に思いを馳せながら読めた。知られざる南方大陸のイメージ。レヴィ・ストロースの「悲しき熱帯」のような人類学者的な後悔は見受けられず、一回目の読後感はスッキリしてますね。
それから、『ウミをたゆたう』の概要に感銘を受けました。

鳴海：私も『ウミをたゆたう』の概要を読んで、向き合いたいものは誠実だと感じました。向き合いたいもの、感じたいものを応援したいと思って本編を読みました。自分がモヤモヤしているものを解決したいという強い思いを感じますが、テキストにそれが定着しているのか、読み手に伝わるように書かれているのかは、未分化、未達成な手応えでした。

立山：まだ調整の途中なのかも…。

『往復する点P』は、フリー素材の使われ方がライトな若い感性で、背景がインスタントに作られてどんどん無名化していく、というのがシンプルだけど面白い。

羊屋：「個人」という言葉の後ろにあること、人権、著作権、肖像権などの重みと、語る口調がふわーとしている感じのギャップが面白い気がする。

立山：初めは、「また若い女の子の個人の話で半径1～5メートルの話か」と思って読みはじめただけど、途中からフリー素材がバシャバシャ出てくる。必要な資料をインターネットから簡単に拝借する、読者・観客の体感や、パソコンをタイプして検索するような触覚も呼び起こす。感性、感受性、立ち上がり方を評価したいです。

羊屋：短いから何度か読みました。ありふれた日常についての語りで、でも10年後には全部書き換えられるであろう恐ろしさも感じる。

鈴木：この簡素さが、上演になった時に、表現できる幅としての可能性を感じてしまいます。サラッと読み通せるし、すかすかにも見えますが、懐が深くて膨らみそうな怖さがある。

立山：私は普段、自分の半径〇メートルを扱う作品にあまり興味が持てない。でも彼女の作品はそういうことも逆手にとっていると感じました。若い人たちの冒険しない、小さいもので事足りているという価値観。インスタントなものを使うことで、貧困があがり出される。

鈴木：『とりで』は良かったんですが、なぜそう思うのか、まだ上手く言葉にはできていません。

岩淵：同感です。良かった。

立山：丁寧なことば、文体、良質。

鈴木：『メモする二人』は面白かった！応募順に読み、けっこう気がめいつてきた半分以上を過ぎたところに読んだこの作品のおかげで、この後に控えている応募作も読み通そうと思えました。かなりのボリュームで、読む時間はかかりましたが、一切飽きなかった。難しいテーマを扱っていながら、これを書かなければという意志に貫かれ、胆力があって、露悪的過ぎず、揺さぶられました。エピソードの取捨選択によるスリム化、構成などはもしかしたら再考の余地はあるかもしれません。

岩淵：「この人でないと書けない」という部分があると思う。

白玉：お母さんと私の会話が面白い。

鳴海：障害を持ってしまったこと、そこから見える社会との関係性、ネガティブなものをはねのける力やそれを塗り替えようとする強い胆力を感じます。

岩淵：『体操させ、られ。してやられ』は凄い面白かった。山縣さんの戯曲は何作か読んでも、過去最高に面白い。言葉の転がし方の面白さ。前の言葉から転がってくる、言葉の中身、見えてる世界、感じている世界が転がっている。

羊屋：これまでは背景はホワイトキューブのイメージだったんだけど、今回の背景・設定は濃く接続して、それが翻される、そこが特徴的。1ページの使い方も変わってきている！

鈴木：個人的にも、続く不況という点からも、劇場に行って何千円も払って演劇を観ることに及び腰になってきているので、特にこういった主題のつかみにくい、抽象的な作品を見に行くことの意義を考え、ためらってしまう部分もあります。ただ、作家がなぜこのような形式で書こうとしているのかは、引き続き考えてみたいですね。

立山：『京の園』も読み物として面白かったです。「岸田國士以前に戻ろう、小説家が戯曲を書いていた時代に戻ろう。」というコンセプトが興味深いと思った。京都が持っているあの暗さ、地面に引っ張られてる感じもあって、その土地にいた人の空気感が読んでいて面白いと思いました。

あと、『廃熱バイパス』も。新しくない、むしろ古臭い。私は普段は物語を読まないんだけど自分の戯曲の見方が変わってきているというか、この作品を面白いと思ったことに自分で驚いた。物語が書ける人が減ってきているということもあるかもしれない。

岩淵：『廃熱バイパス』は書き方が新しいとは思わないのですが、物語を最後まで書ける。「人間は複雑だ」ということ、「角度を変えると違う面が見えるよね」、という

ことが書かれていて、登場人物に血肉があると思える作品でした。作者の都合で書いてない感じが良いです。

以上のような議論を経て下記12作品が一次審査通過作品となりました。

『ウミをたゆたう』 こむこ

『往復する点P』 川辺 恵

『体操させ、られ。してやられ』 山縣 太一

『Terra Australis Incognita』 三橋 亮太

『とりで』 村社 祐太郎

『廃熱バイパス』 近江 就成

『ブラボー!!!』 グミガスキー

『負け戦』 ダドイダイ

『鞠の集い、それから公園』 内田 颯太

『京の園』 神田 真直

『メモする二人』 相馬杜宇

『山羊』 東山丁々

第二次審査会 (11/17)

進行：それでは、第22回AAF戯曲賞の二次審査会を始めます。前回の一次審査で12作品通過しました。一次・二次審査のレポートはまとめて公開され、最終審査は公開で行います。二次審査では12作品を1作品ずつ話し合っていきたいと思います。順番は応募順に進めていきます。それではよろしくお願いします。

『鞠の集い、それから公園』

鳴海：書かれている言葉や構造は若々しい、それゆえに見えてしまう苦しみが反映されていました。応援したいと思わせるテキストでした。みずみずしくて刺激的ゆえに、書き方が粗く少し乱暴ではあります。その粗さや暴力性がどれくらい制御されているのかは、テキストから読み取れないところもありました。

羊屋：書きにくいことを書いていると思います。でもこのセリフ大丈夫だろうか？と思った部分もありますが…。ラストのワークショップ会場から国立公園への転換の部分、ミクロからマクロに変わる視点の、目の付けどころが面白いと思いました。

岩淵：言いたいことがうまく書けていないような感じもするんですよね…。

羊屋：それは分かります。空洞感がある。

鳴海：書けないもの、書かないものを選んでいるようにも感じます。それは潔いとも言えますよね。

鈴木：「そこにいるにふさわしい存在」をめぐる示唆が散見し、「被虐史観」「警察」「公園」といったキーワードから、関東大震災時の朝鮮人が多く犠牲になった虐殺と、そうした歴史を否定する排外主義的な現在の政治を想起しました。終わりが詩的できれいにも感じますが、はっきり描かないのはなぜか？とも考えてしまいます。

鳴海：他の作品でも、現代の問題やタブーのようなものを扱っているものがありますが、それに対して、自分の態度をいかにテキストにするか、その表現力や構構力が作家の力のひとつだと思います。もちろん、その類いの力を発揮することを拒否する人もいます。でも、この作品においては、まだ書けない、というか、構造は見つけられただけ、それを機能させる言葉がまだ見つけられていない状態だと感じます。

立山：技術的にもっと積み重ねが必要。言葉が豊かになってくるともっと良いと思います。（演出家としてこの戯曲を）上演できなくはないが…テキストで判断すると、どうでしょう？

羊屋：カタカナのセリフは海外の人という設定で書いているのかな？

岩淵：謎と思うところに惹かれるときとそうでないときがあって、どう判断したらよいか迷います。分からなくても魅力的なときもあります…

鈴木：終盤のほうが冗舌で、何を書こうとしているかを掴みやすく、読みやすいですね。

鳴海：前半と後半の差については、短歌の構造を意識しているとも考えられますね。

羊屋：だとしたらすごく大きい短歌！

『山羊』

立山：戯曲の規則に則っていて、正当性があり読みやすいと思いました。

鈴木：山羊、掃除屋といった、存在の抽象化のセンスは面白いですね。ただ、メタ的な視点の使い方、山羊のステレオタイプの処理が甘いとは感じられて、どこまで自覚的に扱えているのかが気になります。作為と、描写や抽象化との距離をもう少しとると、さらに良くなると思います。

羊屋：戯曲の手法として、メタファーはよく使われます。例えば政治のことを猫で表現する作品（编者注：『十一ぴきのねこ』作：井上ひさし）とか。ただ、最後に山羊の魂がしゃべるというのが…透明な役柄とは何なのかを最後に明かしていくんですが…。

鈴木：この作品も最後がけっこう冗舌だと思いました。

立山：最後にこんなに説明しなくていい。

岩淵：最後で腑に落ちるんですけど、その分それまでの物語は何だったのかということになっちゃう。山羊は〇〇の象徴ですと言い切ってしまうのはもったいないなと…。

羊屋：山羊に対する考え方は宗教とかでもちがうと思う。私たちの思い込みをずらしてくれると嬉しい。生き物のヤギはとても社交的だし（笑）

岩淵：確かに…生身のヤギと対面したら、思ったより大きいし、蹴って殺せると思わないですよ。

立山：なぜ山羊であるのか、が簡単に分かるのではなく、いろいろ想像できるほうが良いですよ。構造はしっかりしているんですが…

『ブラボー!!!』

羊屋：戯曲で使われている『資本論』、同じ版を持っていたので引用をチェックしてみました。そんなに関係あるかな？というのが感想なんですけど…。

岩淵：うーん、たぶん直接全部は関係ないんじゃないかな。作家は資本論が好きなんだと思う。ある意味ユーモアともいえるかも。

鳴海：その場に存在しても存在していなくても、踊るときに対峙する相手がしっかりしていると観ていて楽しみやすいと思います。その意味で、体を何に対峙させるかと考えたときに出てきたのが『資本論』なのではないでしょうか。前半の舞踏も、後半の詩も、その定義を探る構造になっていて、そのためのテキストとして機能していました。

羊屋：資本論があって、お菓子が出てくる（フィナンシェ）⇒ファイナンスを意味している？とか、細かいところだけど、いくつか機能している気がするんですよ。

鈴木：ジェンダーの視点や役割語の規範性を考慮して読むと、必然性があるのか？という表現がわたしはやや気になりました。また作家の気取りも少し感じます。ブレイクビーツを使うなどで、緊張感とゆるみを作っている戯曲のリズムは心地よかったです。

岩淵：概要に書いてある「私の中には舞踏家と詩人がいる」という言葉が核心となっている。素朴に楽しめるユーモアが漂っていて、攻撃的でない批評性もしっかり書けている。言い訳や恥じらいではなく、「そうなんだ」という感じに好感が持てました。

立山：舞踏家だけならひっかかっちゃうんだけど、自分の中に舞踏家と詩人が、二人がいる、というのは面白いし、まさに概要に書いてある問題意識みたいなものに素直に向き合った作品なんだろうと思いました。

羊屋：前半を読んでいって、この流れは聖書かな、と思ったら、やっぱり聖書が出てきた。西洋がルーツの事柄を、どの程度読み込んで扱っているのかが気になったのですが…そういう扱いではないのかな…。こういう扱いで良いのかが気になりました。戯曲の中にあまり慌ただしさはないんだけどタイトルの「ブラボー!!!」だけが熱狂的、というギャップが面白い、と思いました。

『Terra Australis Incognita』

鈴木：戯曲としてなぜ読みにくい表記を採択したのか、素朴に疑問を抱きました。読む人のことをあまり考えられている感じがしません。異なる位相に変化するカッコの扱いに関しては、慣れれば特に問題ないし、有効な形式だとは思いますが。一方、役柄に名前をつけながら、会話文で数字やア・イ・ウ・エ・オ化される表記が、とにかく読みにくくて…。どういう狙いなんですか…皆さんはどう思いましたか？

羊屋：記号の説明は考えて欲しいよね。会話の言葉はすごく柔らかくて読みやすいのに。

岩淵：何回か戻らないと読めなくて大変でした。

立山：誰が発話しているのかを読み手にまかせてしまう…

羊屋：後半は人物がぜんぶ「？」になっていくよね。

立山：作者としての意図はあると思うのですが、上演を準備する側としてはとても扱いにくいですね…。記号で書くことが若い人たちに流行っているのかな？登場人物の名前を書くか、それが排除されるとしたら数字のみで書くとか…。読んでもらうこと、上演することを考えたときに、これはどうなのかなと思いました。

羊屋：ある部分では平田オリザさんの戯曲の形式（何段かに分けて同時進行の会話を表記する方法）を取り入れているんですが、その部分は短いし特に機能してるように思えないですね…。

レヴィ・ストロースと搾取の問題については、既に多くの人が指摘していることであり、「？」で表すことで個人情報を守っている表現とも読めますが、その構造を今どうするかということまで扱っているかということ、どうかな…。

鈴木：群像劇の記述として、また、神話的な（寓話・伝承）話としては面白く読みました。さっき話題にした、役名・属性がありながら、数字やア・イ・ウ・エ・オ表記になること、抽象度の高さを作ろうとしているのでしょうか。

岩淵：読んでいてつまづくところが粹組みなのが残念ですね…。何人かで声に出して読むと把握しやすいし面白そう、まだ見ぬ南の島の設定が、ぼんやりと楽しそうなのは想像できます。でもひとりで読むと大変。この書き方を試しているのかな、とも思うのですが、書き方からうまく受け取れないので戯曲賞としては評価しづらい。

コロナで外出しづらいから、旅行したい気分になるというのは共感できます。でもそれは今必要な物語なのか？という疑問も感じます。

鳴海：ジョージ・エリオットの小説のような広がりを感じました。ひとつの齟齬・ひとつの印象が、別の事象と相似を為して、それがだんだんずれていく。この手法は分かるんですが、これが未知の南方大陸と題されているのが、内容というよりも未完の、もしくは継続中のプロジェクトにつけられたイメージなのだろうと思います。使われている言葉による、この世界のデッサンの線画数が意図的に少ないですし、機能性が前に出すぎているのが惜しいなと感じます。

『ウミをたゆたう』

羊屋：とにかく作品概要が良かった！

岩淵：あまり現代演劇の創作に関わっていないので「ト書き」の持つ力がどれほど強いのかという問題が理解しきれいていないのですが…。

鳴海：原理原則としては、ト書きは台詞と同じくらい強いですね。「信用されるものとして扱う」というのが基本です。

立山：ト書きはセリフと同じくらい強い。でもセリフは変えることはできないけど、ト書きはまったくそのとおりやらなくてもよいという感覚ですかね…。まずはト書きどおりにやってみる、それから考えるというような。

岩淵：一般的なト書きの書き方と演出の向き合い方は人によりますよね。

立山：おそらく個人的な体験をもとに書いているんじゃないかと…パターン的なことを学びすぎているように感じました。

岩淵：一般論としてではなく、この方が「ト書き」に新たにアプローチしたいと考えているんですね。

鈴木：会話文以外、いわゆるト書きの箇所の表現方法が、うまくいっているように思えず、わたしには迫ってくるものがありませんでした。言葉を脱臼させようとしている遊びや詩的な表現が、生きている感じがあまり感じられません。

岩淵：2つの世界を行き来、という構造ですが、交わらない2つがどこかで重なるというものになっていないので、それがうまく機能していないように感じました。

羊屋：ものを書くアンテナは感じられます。それを可視化するのに今後期待したい！

『往復する点P』

鈴木：読み直してとても面白かった！ はじめの、たった1ページで、ファスト風土的な情景、消費構造の歯車のような設定を巧妙に提示し、さらに固有の何かも感じさせていると思います。

羊屋：巧妙に、上演したくなる仕掛けがいっぱいありましたね。

立山：シンプル、ライトだけど読み手に対して訴えかけてくる。今の若い人に「出世したくない、このあたりで十分」という空気感があるのは感じているけど、それをこういう形で書いてきたということが新鮮でした。

岩淵：一人芝居なんだけど、いわゆる舞台の「一人芝居」とは違う…YouTubeでしゃべっている感覚？自我が押しつけがましくなくて気持ちいい。

鈴木：「善良な市民」的な道徳観の扱いやセクシュアルなおい、手ざわりも散りばめつつ、固有名詞の使い方も抜け目がない。

岩淵：そうそう、お風呂とか、ボディークリームを塗る、とかそこかしこに少し生々しい身体を感じる。読み物としては気持ちいいが、上演としてはどうか。戯曲以上に魅力的な上演になるでしょうか？

立山：戯曲で出せているテンポ感が出せれば、魅力的な上演はできます。ただし短い。上演したら20分くらい。

鈴木：間に入っているフリー素材を複数の人で演じるとか？ 展開させても、面白そうですね。描き込みすぎず、しかし語り手の外も想像させるし、「かわいい」のようなト書きも作為的で、どう解釈するか？と、演出家に挑戦的とも思います。

岩淵：人物だけに焦点をあてるのではなく、それを取り巻く地域とかが見える。一日に何回も上演されても面白いかも。

鳴海：面白いんですけど、どうやってこれを位置付けるかが難しいですね…。7ページ目の具体的なカレンダーが出てくるところで、往復する時間の縮尺を変える作為があって、そういう縮尺変更が作品を支えているように感じます。素材の提供のような「演出で上手くやってね」というスタンスに読める応募作も多い中で、この構造物に何を代入したら何が見えるかに期待が湧くという意味で、構造物や数式として成立している感があります。

立山：地名がいろいろ出てきて世界の広がりを感じられるのも上手いですね。

『とりで』

立山：丁寧で気になった作品です。皆さんどう思われましたか？

鳴海：かなりハイコンテクストな作品でしたが、自然主義的に根拠が確かな言葉が丁寧に選ばれていて、戯曲として緻密だと感じました。日常での些細で、ほぼ顕在化されないつまずきのようなものに関心を持った作家の誠実な作業だと思います。見えにくいものを書こうと思ったとき、テキスト上で分かりやすいサインは書きにくい。この作品も決して分かりやすくはないですが、明示性を慎重に避けながら書かれている信用できるテキストでした。岸田國土作品にも重なる部分を感じます。

立山：ヴィヴィッドに書かれている。訴えかける。直接的でない。丁寧、上品。概要を含めて面白い戯曲だと思いました。

羊屋：読み手は何をすべきか…戯曲の中に仕掛けがない。概要がなかったら違うことを考えていたかも。

岩淵：すごく面白いと思った。知らない人に対して情報を出す、絶妙なバランスを見える形で書いている。その手つき、書き方が魅力。繊細なバランスの上で会話が成り立っているように感じました。

立山：家族を書くのは凄く難しい。人間同士を絶妙なバランスで描ききるのは凄い。

鈴木：戯曲に出てくる土地などの固有名詞、商品名から、戯曲空間の文化レベルが推察されます。作者の気取りなのか、作為なのか。ト書きの人物像の描写、セリフの揺らし方

など非常にきめ細かく、危ういバランスを書いていると思うので、作為だと思うんですが……ただ、その場合どう考えたら良いのか、まだ判断がついていません。もっと読み込みたいですね。

羊屋：ブランドの名前が出てくる。生活水準が高いのかな？とかも思って。

立山：そこにわびしさがありますよね。ブランド名が指定されているからこそ、観客もその体感を共有する。こういうのを使った人たちだったんだ、みたい。本当は家族四人。何もない部屋で、息子が来たときの対応とか、離婚した夫婦だけと通ってきているとか固定概念を裏切る感じがありました。短くてあっさりしているけど、濃い。

『メモする二人』

鈴木：一次審査の時に面白い、と推したのですが、ノミネートするとなると戯曲が公開されるため、現実にもどのような影響を及ぼすか考慮せざるをえず、躊躇しています。皆さんの意見を聞きたいです。

羊屋：作者とちょっと話してみましようか、とは言えないし…中身と作者を切り離すことはできないですね。

鳴海：当事者にしか書けないものがあるという点で強い意義があると感じます。ただ、そういう点を抜きにテキスト論的に読むなら、言葉の選び方に主観的な主張が多く、装飾過多な部分があるようにも感じます。文学的、戯曲的な手法においては、他の応募作にも見られるようなエンタメ的で読みやすさが前に出た形式だと感じます。この内容で読みやすいというのが、当事者である点と作家としての技量と切り分けが難しいケースだと思います。

岩淵：ある種の地獄巡りとして読みました。書き方がライトでそれほど深刻ではないように見せている。ちょっとずつ解決していく面白さがありました。

立山：セリフには会話の面白さがあると思うし、書き手として巧みだと思います…が、それ以上の言葉は私個人にはないです。これは好みの問題なのですが…モチーフとして「演劇の世界」を扱うこと自体に興味を持ちにくいということはありません。

鳴海：身の回りに起こったことを告発的な話法も使いながら、赤裸々にエピソードに組み入れて書いていますよね。

鈴木：エンタメ的な書き方、手法自体に問題はないと思いますし、扱っているテーマに切実さがあると感じるのは、一次審査のときと変わりがないんですが……ただ、作者と作品の扱っている題材の距離が近すぎるだろう一方で、実録的な表現が、戯曲の外、現実にハレーションが起きる可能性に対して、コントロールできているかということ、疑問が残ります。現実で感じていることのエッセンスを、違う設定で書くなど試みると、読者・観客に判断する余地ができるんじゃないか？と考えもします。

羊屋：「戯曲審査とは何か」を考えるとまさにこの作品はそこをテーマにしているので考えてみるべきか…とも思うんだけど…

鳴海：台詞の端々で主観的に断じるような言葉が多く使われている点がやや気になります…多様性を認めるというよりは、反転した、反転させた強者の弁のようにも感じます。

岩淵：書き方に疑問が残る、というところでしょうか…。

鈴木：ギャグ、言葉遊び、失禁のシーン、猫を飼いたいというセリフなどに、作者のかわいげがありますよね。ハイアート化する演劇とその権力性の問題、貧困、地域格差、ジェンダーやセクシュアリティのありよう、概要に書かれた上映空間に対する意識といった、切実な問いを突きつける挑戦的な作品であることや、それをふまえてエンタメ要素も入れつつ、これだけの枚数を書ききった胆力には並々ならぬものを感じます。しかし、やぶれかぶれと取れる告発的な形式が適切とまで思えず……この作家は、さらに良いものを書けると期待しています。

『体操させ、られ。してやられ』

岩淵：山縣さんの戯曲の言葉遊びだけじゃない魅力が感じられました。

羊屋：今までと違って、内側のものが外側に出ている。後半から核心に迫るが、前半も面白い。

鈴木：どう読んでいいかの手がかりがわからずにいます。あと、たとえばジェンダー規範にとらわれているような、言葉づかいの古さが気になりました。

立山：慣れてないと読みにくい。面白さが分かりにくいというか…音にして読んでみると変わってくるかも？

岩淵：読みやすさではなく、感じるものがある。

鳴海：今までの応募作品との比較は審査上、私は重要視しないようにしています。言葉のイメージが転がって別の言葉との連関にスライドして、位相が変わっていくのが心地よく、私には戯曲のようなレイアウトの散文詩のように読めました。戯曲としての評価というよりも、詩の技巧としての評価の方が正当な気がしてしまうのですが、詩としての評価はこの場では難しいです。

立山：読むときに「ここに身体が入る」と思って読んでいます。戯曲はそもそもそういうものだけど…詩を評価するとなると、どういう議論になるかが分からないというか…。

鈴木：岩淵さん、羊屋さんがここまで推している作品なので……この作品がどう未来を照らすのか、聞いてみたいです。

『京の園』

鳴海：レーゼドラマとして、この文量の構造物には力があると感じます。ただ、上演した時に見えそうなものについては、時代や社会、価値観に対する現在からの批判的な視座が弱いように思います。京都やそこで培われうる価値観という風土の一端について咀嚼はできても、そこからの発展が読みにくい作品でした。

立山：そうですね、一次審査では、読ませる物語が書ける、ということなど丁寧な筆致を評価しました。二次審査としては「今この作品を上演する！」という意義において弱いと思います。今なぜこのモチーフを取り上げるのか、現在に照らしてこの作品を上演すべき必然性は何か、もう少し踏み込んだ検討をすると作品の強度も上がると思います。

鈴木：京都という土地の歴史の変遷や、そこに住んでいた人の生き延びるための企み、狡猾さを、象徴的に使おうとする狙いは、何らか感じる部分はあったと思います。帝国主義や家父長制に対する批判的な意識として理解し応援したいところですが、ただ一方で、例えば、当時の女性蔑視の一般的な価値観やキャラクターが、ステレオタイプの域を出ない感じもありました。特定の属性に対する蔑視について、現代において表象する上での潔さは評価したいですが、ままならないものをままならないままに置くのではなく、説明してしまっているところが気になりました。

羊屋：読み物としては面白い、と思ったんだけど…役割を背負わされているのが女性に偏っているところが気になります。

『負け戦』

岩淵：「面白い！」と思う部分と、「結局何が書かれているのだろうか？」と思う部分と、半々の気持ちになりました。

立山：「上手い！」と思わされる反面、前半のテンポのよさが後半で回収しきれていなかったのが悔やまれます。今後も頑張ってください。

羊屋：テンポが無くてもいい。登場人物の口調が同じということに恐怖感をも感じつつ、「どうしたこと!？」と思いながら読みました。

鈴木：会話の脱臼に笑える箇所もありました。不条理劇としてのスタイルが、なぜ必要なのか、どういった作家の意識によって要請されているのか分からず、緊張感が薄いように感じました。この作品も後半が冗舌ですね。

羊屋：「どこが負け戦？」と思わされる、誰の負け戦か分からない気持ち悪さが良い。この人の持ち味ですね。

『廃熱バイパス』

立山：読み返してみて、やっぱり面白かった！

羊屋：青春もの。男くさい感じもある。最後のシーンとかね。男子校っぽさというか。

鈴木：ハイエースで帰る前半は、PC（ポリティカル・コレクトネス）的にアウトとされかねない無自覚な悪意を含めて、逃げずに粘り強く書いていると思います。ビジョンも緻密だし、フィクションと作家の距離感も取れていて、会話の流れのさばきも非常に丁寧、かつ計算しすぎてない抜け感もある。リアリズムのドラマの面白さを感じました。ただ、進むにつれ、物語の方向性について説明的になって、拙速で緊張感が薄く

なったような。唯一の女性のキャラクター「白井さん」がファンタジックな存在に見えることについては、まだ考えきれていないので検討したいです。

鳴海：生活の中で感じる我慢を活かしながら書いている感じが現れていますが、それがおしつけがましくないバランス感がいいと感じました。後半若干焦っている肌触りもありますが…色々な視点やストーリーラインを取り入れる手さばきがとても上手い作家だと思います。

鈴木：ト書きを読むと、小説でいけない理由はなんなのか？ という疑問も抱きましたが…わたし個人としては、地域性、労働者階級、貧困、さまざまなディスアビリティやインペアメントを、ニュースではなく生身の個人の生活を通して立ち上がる、人間のドラマの力が必要と考えているので、最終審査に推したいです。

岩淵：私も最終審査に残したいと思う戯曲です。

上記のような議論を経て、以下5作品が2次審査通過作品となりました。

『往復する点P』川辺 恵

『体操させ、られ。してやられ』山縣 太一

『とりで』村社 祐太郎

『廃熱バイパス』近江 就成

『ブラボー!!!』グミガスキー

◆上記ノミネート戯曲はAAF戯曲賞ウェブサイトでご覧いただけます。

<https://www-stage.aac.pref.aichi.jp/event/aaf/index.html>

◆第22回AAF戯曲賞公開最終審査会

1月28日（土）13:00～ 愛知芸術文化センター12階 アートスペースEFにて

ライブ配信 <https://www.youtube.com/channel/UCy1oaUEnq0TN1Rdw2fy11fg>

(愛知県芸術劇場YouTubeチャンネル)